

〔論説〕

## 社会言語学：その仕組み、展望と社会の中での言葉遣いについて

バリー カヴァナ<sup>1)</sup>

### Sociolinguistics: The mechanisms and perspectives of language use within societies.

Barry Kavanagh<sup>1)</sup>

#### Abstract

Sociolinguistics is the study of how aspects of society, including its cultural norms, expectations, and context, have an effect on the way language is used. This paper traces the roots of this branch of linguistics examining its development in the West and in Japan, focusing on the principles it was founded on, the methodology employed, and investigating the core elements of the discipline providing examples of studies conducted within Japan that reflect the field.

(J.Aomori Univ. Health Welf. 10 (2) : 225 - 230, 2009)

キーワード：言語変種、言語行動、言語意識

Key Words : Language variety, behavior and consciousness.

#### 要旨

社会言語学とは社会的要因、文化的規範、期待と文脈がどのように言葉遣いに影響を与えるかという学問分野である。本原稿はこの言語学の一部の起源を明らかにし、欧米と日本でどのように社会言語学という研究の発展がされていったかを振り返り、焦点とする社会言語学の源泉の創設、使用する方法論、例を通じて日本と欧米の研究を挙げ、説明する。

#### 1. はじめに

「社会言語学」という用語が作られたのは1950年代である。言語というものが社会の中ではどのような地位になるのか、言語学者及び社会学者の双方の考え方をまとめ、特に言語における多様性が社会に密接に関係していることについて注意を向けさせたのである。比較的若い研究領域ではあるが社会言語学という分野は、特に、米国で70年代から栄え始めてきたものである。その勢いは今日でもまだ衰えていないと言える。社会言語学とは社会階層、教育水準ならびに教育の種類、年齢、性別、人種などの社会的要因との関連で言語を研究する学問分野である。社会言語学の仕組み、展望を明らかにするこ

とが本原稿のねらいである。

#### 2. 理論の歴史的展開（誕生・展開）

「社会言語学」という分野は、1960年代後半、又は70年代前半から欧米において発展してきた分野である。これは従来の言語学へのアプローチである、純粋に言葉のみを研究する、つまり言葉をそれが使われる「コンテキスト」、「話し手」、「聞き手」といった社会的要因から切り離し、研究するという方法に対しての反論として始まったものである。

理論的基盤となっているのはHymes (1974) が、Chomsky の competence 「言語能力」の仮説に対して communicative competence 「伝達能力」の仮説を提出し、従来の理論中心の言語研究では十分ではないということを提唱したことによるものである。さらに、これまでの理論の方向性の見直し及び、社会的に再構成された新しい枠組みの必要性も提唱した。

つまりHymes は、我々が文法的に正しい文を作れるだけにあらず、特定の場面で「何をどのように言うか」、また「言うべきではないか」等の、場面ごとに応じた適切な言葉の使用ができることも言語能力に含まれるとし

1) 青森県立保健大学健康科学部栄養学科

Department of Nutrition, Faculty of Health Sciences, Aomori University of Health and Welfare

ている。このような言語行動を規制しているものを伝達能力と捉え、その解明こそが社会言語学の課題であるとした。

社会言語学的において、伝達能力という概念は、現代言語学の主流における中心的な概念の言語能力と言語運用という二文法にとってかわることを意図する。伝達能力は文法的に正しい文を生み出すために、ある言語の文法規則を応用するだけでなく、その文をいつどこで誰に対して使うかを理解している能力である。一方では、「言語能力」は文法の規則を理解している能力である。それに対し、その文法規則を適用することを「言語運用」と定義されている。話し手は文法的な文、つまり文法規則によって派生しうる文章を組み立てる際、言語能力に頼る。英語は代名詞体系の中に区別を文法的に組み込んでいないが、すべての文法的な文が同じ状況で使われるというわけではない。

(例) 「タバコを消しなさい」(Put out the cigarette)  
「タバコを消していただけますか」(Would you mind putting out the cigarette please?)  
「煙くないかい」(Don't you think it is smoky in here?)

上記3つの例はどれも文法的に正しい英語の文である。しかし、特定の状況では、どれを使うのが妥当か、その妥当という点でそれぞれ異なっている。話し手は何を言うか、と同時にそれをいつ、どのように言うかを選択する際には、伝達能力に頼るのである。

Romaine (1994) によると現代言語学を文法の研究に限定してしまったことによって、言語が「社会」の中でどのように機能しているのかという興味深いたくさん問題を調べることをはじめから切り捨ててしまっているのであると述べている。その問いかけこそが、社会言語学という分野における主要テーマと言えるであろう。

### 3. 根本的関心・学問的立場(テーマ、方法論、学問観など)

真田(1992・2006)によると、日本では1970年代から社会言語学について発表物の数が急激に増加し、1980年代の前半にピークに達しているそうである。1970年代以降の動向は、明らかに欧米のSociolinguisticsからの影響によるものであるだろう。日本の社会言語学をリードしてきた真田は、日本における社会言語学の分野を次のように分類している。これまでに各分野で示された研究についての例を挙げていく。例を通じて社会言語学の仕組み、展望などを検討していきたい。

#### 3.1. 方法論

社会言語学という分野を立てる以上、理論的基盤とな

る社会言語学の観点と方法をもたなければならない。日本の社会言語学にとって固有の問題である優先順位、研究の特徴を知ることも必要である。また、データを収集する方法を検討し、方法論を確立することも考える必要がある。

#### 3.2. 属性とことば(言語変種)

ことばの使用者の属性(例えば、職業や社階層の違い、年齢差、性差など)とことばの変異の関係を扱う。

照二(1997:57)は「言語のバリエーションということを考える時、この人の研究を避けて通ることはできない、それほど大切な学者の1人にウィリアム・ラボフ(William Labov)がいる。」と述べている。

言葉のちがいが社会階級と結びついていることは、しばらく前から知られている。Labov(1972)の研究はニューヨークでの居住者を、4つの社階段級(上流中産/下流中産/労働者/下層)に分け、この4つの階級と母語の直後の/r/の有無の関係を、次の5つのスピーチスタイルについて調査した結果のものである。

1. くだけたスタイル
2. 慎重なスタイル
3. パラグラフの良読スタイル
4. 単語のリストの音読スタイル
5. 最小対語(例えば, guard (gard) と god (gad) の音読スタイル)

結果によれば、下流中産階級の人たちは、他の階級の人たちに比べて、スピーチスタイルが改まるのに応じて、威信ある/r/のものになる。それは、言葉遣いをそう意識はしない砕けたスピーチスタイルにおいて下流中産階級層では上流中産階級層程に威信形/r/を発音しないものの、スピーチスタイルが改まるにつれ、言葉遣いに注意を払い、/r/をきちんと発音しようと意識し、結果、上流中産階級の人たちを凌いでいるのである。理由としては、彼らの強い上昇志向態度が考えられる。自らの社会的に不安定な立場に不満を持ち、より高い地位を求め威信ある標準的な発音をしようと熱心に努力するため、と考えられている。

#### 3.3. 言語行動

場面とコード(code switchingなど)選択の関係、敬語の運用、コミュニケーション行動など、ことばを用いた行動のパターンや原理を探る。

言語行動の例はコミュニケーション行動である。ロボ(1984)によると、二者間の対話では、言葉によって伝えられるメッセージ(コミュニケーション内容)は、全体の35%にすぎず、残りの65%は、話しぶり、動作、ジェスチャー、相手との間のとり方など、言葉以外の手段に

よって伝えられると非言語コミュニケーションの重要性を指摘している。

非言語伝達はコミュニケーションのノンバーバルな部分を担っているものであり、非言語伝達の研究無くしてはコミュニケーションの全体的な仕組みを体系的に考察することはできない。

### 3.4. 言語生活

生活環境や生活様式とことばの関係、また命名などについて扱う。真田（1990）、室山（1987）によってなされた研究を参照にした。

次に挙げる例は漁業に従事している地域社会（鳥取県気高町姫路）における「波」に関する語彙を揚げたものである。魚村ゆえに対象が細かく区別され、語彙量の多いことが指摘される（31語）。一方、林業に従事している地域社会（富山県上平村真木）では、「波」に関する生活語が、ナミ＜波＞・シブキ＜飛沫＞の2語しか観察されない。山村ゆえに波をめぐる生活領域そのものが欠如しているわけである。

次に挙げる例は五箇山方言における「雪」に関する語彙を揚げたものである。雪国ゆえに対象が細かく区別され、語彙量の多いことが指摘される（21語）。一方、竜美の加計呂麻島方言では、「雪」に関する語が、ユキ＜雪＞1語しか観察されない。この地ではアラリ＜霰＞がときに降るが雪はほとんど降ることがない。南国ゆえに雪をめぐる生活領域そのものが欠如している。

### 3.5. 言語接触

方言と標準語の関係、外来語二重言語併用など二つ以上のことばが接触することやそれによって生じる影響を考察する。

言語接触の例の一つにネオ方言と擬似標準語がある。北部九州などでは、存在動詞としての「ある」という語にもアスペクト形式の「ヨル」が接続する。「いま運動会がありヨル(行われている)」「そういう意見がありヨッタ(前からあった)」のようにである。この文脈での「ヨル」「ヨッタ」も、改まった場では標準語の「テイル」「テイタ」に交換されるのである。「いま運動会があっテイル」「そういう意見があっテイタ」となるのである。（陣内 1996 参照）

図1は、北部九州における「あっテイル」の使用と標準語意識についてたずねた結果である。この地域ではこの表現は標準語意識が高く、新聞投書欄や、ある欄の趣意書など、書き言葉としてもたびたび登場している。

このような、標準語を指向する過程で生まれる新形式（要素）で、話者が標準語だと思い込んで使っているものは「擬似標準語」と呼ばれている。

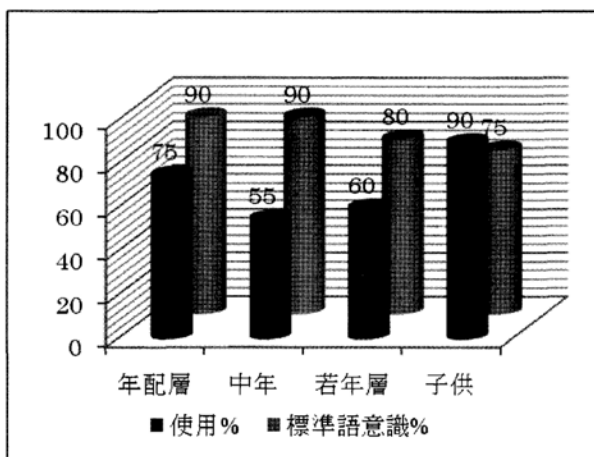


図1 「あっテイル」の使用と標準語認識

### 3.6. 言語変化

言語変化では、各地の方言の共通語化、新方言やネオ方言の発生、移住とことばの変化の関係などを扱う。

表1は、小野（1996）の研究で、北海道、屯田入植地の深川市納内町での語彙調査の結果を参照にしたものである。福井県出身の2世・3世・4世の間において、二つのパターンの異同が見られた。

表1のAは福井方言式の言い方が、1世から2世または3世まで受け継がれているが、3世または4世で共通語化しているものである。

表1のBは、2世で北海道方言式の言い方が取り入れたが、3世または4世で共通語化しているものである。しかし、3世または4世ですべて共通語化するのではなく、北海道で新しく取り入れられたと思われる、デメン（日雇い）、ナゲル（捨てる）、ダハンコク（だだをこねる）、シタッテ（だって）、ドチライカ（どういたしまして）などは、2世・3世・4世がともに使っている。

### 3.7. 言語意識

ことばの規範、方言やことばについてのイメージ、差別語など、言語使用者とことばの位置づけの関係を論じる。

例えば、「ことばと態度」として図2「外国人の話す日本語」を見て頂きたい。1995年の「国語に関する世論調査」によると外国人の話す日本語は、どのような日本語であるのが望ましいと思うかを全国で聞いた結果である。B「外国人だから、意志が通じさえすれば、多少変な日本語でもかまわない」が58.6%と高く、C「外国人だから、意志が通じさえすれば、どんな日本語でもかまわない」の24.2%、A「外国人であっても、日本人と変わらない日本語を話すべきである」の12.7%を大きく上回っている。なお、図2には示されていないが、A「日本人と変わらない日本語を話すべきである」とする回答は、60歳以上の年齢層において相対的に多く出ている。

表 1

## A 福井方言式

	2 世	3 世	4 世
一昨日	オトツイ	オトツイ	オトトイ
きなくさい	ケナクサイ	ケナグサイ	コゲクサイ
行かない	イケン	イカレン	イケナイ
ごはんが腐る	スエル	ウルクナル	クサル
味がうすい	アジナイ	シヨンナイ	ウスイ
見なかった	ミナンダ	ミンカッタ	ミナカッタ
しおからい	カライ	シヨッパイ	シヨッパイ
いない	オラン	イナイ	イナイ

## B 北海道方言式

	2 世	3 世	4 世
馬鈴薯	ゴショイモ	ゴショイモ	ジャガイモ
白準	ガンビ	ガンビ	シラカバ
煙突	エントー	エントー	エントツ
惜しい	イタワシー	イタワシー	モッタイナイ
ガオル(弱る)	使用	使用	使用しない
ナガル(成長する)	使用	使用	使用しない
タガク(待ち上げる)	使用	使用しない	使用しない
笑わサル<自発>	使用	使用しない	使用しない

出典：小野米一（1996）「移住と方言」「方言の現在」明治書院。

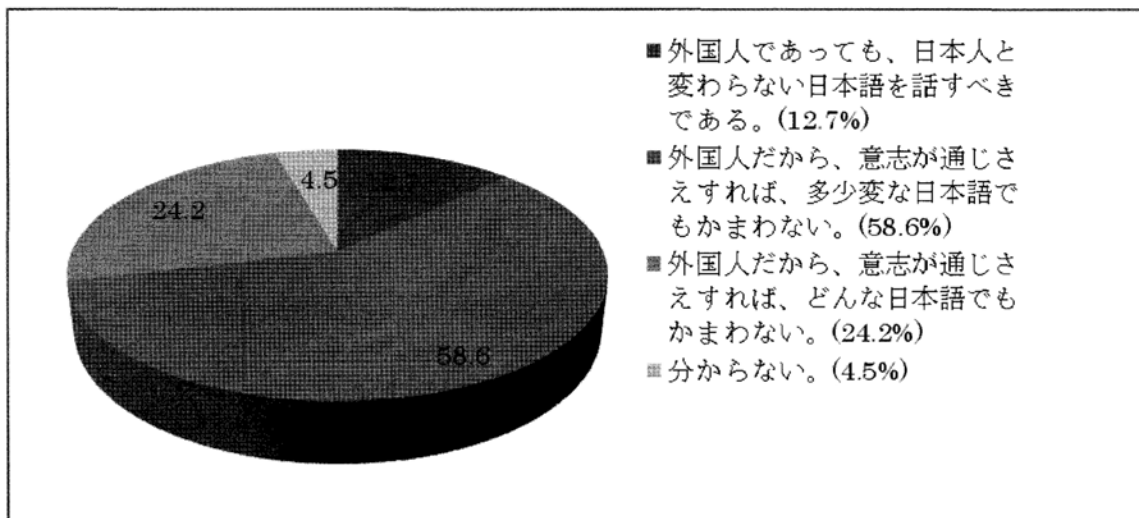


図 2 外国人の話す日本語

## 3.8. 言語習得

第二言語習得や中間言語に関わることを扱う。例えば、外国語学習者は表面的には完璧な目標言語の文を作っていないながら、言語の適切な使い方についての知識、他人とコミュニケーションを行ないたいときには、社会的な背景、互いの関係、相応しい丁寧さなどをわきまえていなければならない。外国語学習者母語話者に比べると異なった中間言語行動をとることができる。目標言語に対する社会言語能力が身につけていないケースである。

## 3.9. 言語計画

ことばの正字法の確定(国言語国字改革など)のほか、言語教育や言語使用に関わる政策的なことを扱う。例えば、1954年に日本語を書き表す場合に用いる(ローマ字のつづり方を日本政府が公布した。)

## 4. 理論の批判的分析

Romaine (1994)によると社会言語学には、研究によって判明したことがらを位置づけたり解説したりするための、だれもが納得するような理論的モデルがない。

しかし、社会言語学者たちが自分のデータをすべて当てはめていくことができる既成の社会論理は現段階では存在しない。それでも、そうした論理の追求を止めていいという理由はどこにもないのである。社会言語学はまだまだ新たな学問分野である。Romaine は、非西欧型社会での経験を踏まえて研究も、もっと必要であると上程している。

社会を建設するうえで言語が果たしてきた役割を社会学者たちはほとんど黙殺してきたので、理論的な面での発展をめざすには、言語学と社会学との厳重な協力関係に基づいて研究が前進しなければならないだろう。しかし、当代、本流をなしている言語学に社会言語的方法論を移植することによって、満足のいくような社会的言語論理をつくりだそうとすることにはあまり意味がないことも明らかである。

更に、Romaine は、いま主流となっている言語学は、言語能力と言語運用の二つを基本的に区別しているが、社会的な側面をも考察に入れつつこの両者についての研究を進めようという姿勢が基本的にみられないと述べている。

## 5. 今日の意義と将来

社会言語学は、社会とことばの相関関係に焦点を当てた学際的な研究分野である。学問としては、歴史は浅く、以前は言語を社会との関連のなかで理解する言語学の一部として理解されたり、あるいは社会学の一部として社会を言語との関連で明らかにしようとする分野として捉えられたりしたこともあった。つまり、社会言語学とは言語学の一部であって、言語を一つの社会的ならびに文化的な現象として取り扱う学問である。

学術研究全般の流れとして、1980年代以降に学際的な研究が強く意識されるようになり、その潮流は社会言語学にも大きな影響を与えた。「言語学的」「社会学的」といった区分を厳しく設定してしまうと、研究の発展が抑圧されてしまうことがある。むしろ、「言語学」の知と「社会学」をはじめとした関連分野の知とのあいだを往復運動しながら、研究を進めていくことこそが、学際的な研究分野としての社会言語学に適切な態度であると考えられるようになった。

欧米の社会言語学では、言語体系だけではなく、言語体系の外側にある社会に注目している。ただのことばと社会の関係だけという研究なのではない。さらには、欧米における社会言語学の特徴は研究対象となるグループが固有にもつ文化を尊重する異文化研究の鮮やかなものである。

中井、町田（2005）によると、異文化、自文化を写し出す鏡として使い、自文化の理解をさらに深めること

も、教養を高めることにつながる大切な目標といわれている。社会言語学についても同じ考え方が成り立つ。異なる言語を使用する社会や集団を、自らを写し出す鏡として用いて、自分たちの言語を、更には、その言語を使用する社会や文化をさらに深く理解することが、社会言語学の重要な役割だと言えると思われる。

Androutsopoulos（2006）によると CMC は分野の中で様々な社会言語学の問題があり、ジェンダーと言語、言語変種と言語行動を例として挙げられる。社会言語学者の Currie が1952年に言った言葉に“Possibilities for further sociolinguistic research are, in fact, beyond estimation.”「将来の社会言語学的な研究の可能性は、実際のところ、想像できないくらいに大きい」がある。照二（1997）は「われわれの言語生活のすべてが社会言語学の研究対象となるといってよいだろう。社会言語学はまさに、宝庫と言ってもいいようだ。さあ、皆さんもこの宝庫を開けてみようではないか。なにが出てくるか、楽しみだ。」と述べている。私自身も同意見である。社会言語学という領域を通じて新たな発見をし続けていきたい。

〔受理日 22 年 1 月 5 日〕

## 参考文献

- 1) Androutsopoulos J (2006) *in Introduction: Sociolinguistics and computer-mediated communication*. Journal of Sociolinguistics 10:4. Theme Issue: Sociolinguistics and computer-mediated communication
- 2) 津田葵、ロボ F (1984) 「非言語の伝達」『英語コミュニケーション論』大修館書店
- 3) 文化庁文化庁国語課 (1995) 「国語に関する世論調査」世論調査報告書
- 4) Currie H (1952) “A projection of socio-linguistics: the relationship of speech to social status,” The Southern Speech Journal, 18, pp.28-37. (Reprinted in J. Eilliamson and V. Burke (eds.) . A Various Language: Perspectives on American Dialects. Rinehart and Winston.
- 5) Hymes D. (1974) Toward ethnographies of communication. In Foundations in Sociolinguistics: an Ethnographic Approach. Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 3-28.
- 6) 陣内正敬 (1996) 「北部九州における方言新語研究」九州大学出版会
- 7) Labov W (1972) Sociolinguistic Patterns. Philadelphia. University of Pennsylvania Press.
- 8) 室山 敏昭 (1987) 「生活語彙の基礎的研究」和泉書

院

- 9) 中井 精一、町田 健 (2005) 「社会言語学のしくみ」  
研究社
- 10) 小野米一 (1996) 「移住と方言」「方言の現在」明治  
書院
- 11) Romaine S (1994) Language In Society. An  
Introduction to Sociolinguistics. Oxford. Oxford  
University Press.
- 12) 真田、渋谷、陣内、杉戸 (1992) 「社会言語学」桜  
風社
- 13) 真田信治 (2006) 「社会言語学の展望」くろしお出版
- 14) 真田信治 (1990) 「地域言語の社会言語学的研究」  
和泉書院
- 15) 照二東 (1997) 「社会言語学入門」研究社